

## 現代語版『小説神髓』（五）

### はじめに

『小説神髓』は、ごく簡単な擬古文で書かれているのだから、わざわざ現代語訳する必要はないし、近代文学を勉強しようとするものなら、当然、原書にあたって勉強すべきだというのは、なるほどそのとおりだとは思いますが、実際に、『小説神髓』を原書のまま読んで、正しく理解できる人は、大学四年生くらいでもごく少ないし、とくに、この本を読んでほしいと思う、大学二、三年生ではほとんどいないといってもいい。そこで、いくらか無駄な仕事に属するかもしれないけれど、あえて『小説神髓』の現代語訳をすることにした。訳にまちがいや不適切な表現があるかもしれない。識者の叱正を乞う。

なお、注は、日本近代文学大系『坪内逍遙選集』（中村完注釈、角川書店、昭和四九年一〇月）、岩波文庫『小説神髓』（宗像和重解説、二〇一〇年六月）に詳細な注があるので、ここでは最小限にとどめた。また、柳田泉『小説神髓』研究』（春秋社、昭和四一年）に詳しい解

説がある。これらの先行研究にはさまざまに教えられるところがあったので、記して、感謝の意を表したい。柳田氏の著作には、本文の解釈に相当する部分があるが、本稿では、なるべく直訳を心がけた。

日本近代文学大系は、『逍遙選集』別冊第三を底本とし、初版本（松月堂、明治一八〇九年）を参照したとある。なお、柳田泉氏による岩波文庫本に初出と『逍遙選集』の異同についての注記があるほか、宗像和重氏の解説本は、『逍遙選集』を底本として、初出との対照表がある。

本稿では、若き日の逍遙の口吻を髣髴とさせたいと思い、初出本に拠った。本稿は、『小説神髓』を原文のままに理解したくても、できずにもどかしがっている初学者を念頭において訳したものである。

### 小説の利益

小説は芸術である。実用に供すべきものではないので、その実益

坪内逍遙 著  
坂井健 訳

について議論するのは、むしろおかしなことだろう。そうはいっても、音楽絵画のたぐいにも、暗に実益があるように、小説、歴史物語の場合でも、作者が特に望まなかった利益も、場合によっては少なくない。思うに、芸術家の望むところは、ひたすら美妙的な感覚を与えて、人を楽しませることにあつて、特に他に望むところがないからである。前にもすでに論じたように、芸術の名人の技量が神業の域に入つて、完全な美の程度に至つたものは、大いに人心を感動させて、暗に品格を高尚にし、教化を助けることがあるけれども、それは芸術の名人のが神業の域に入つて、自然に生じた結果であつて、決して、芸術の目的ではないので、その直接の利益を言つたとしたら、大きな誤りであるにちがいない。こういうわけだから、小説の利益を述べようとするには、まず、あらかじめ区別を設けて、一つを直接の利益とし、もう一つを間接の利益とするのがよい。直接の利益は、人の心を楽しませることにある。言葉を変えていうならば、小説の目的は娯楽を人に与えることにある。娯楽にも種類は多い。そして、小説が目的とするところは、人の文心を楽しませることにある。文心とは何のことを言うか。いわく、美しい情緒がこれである。そもそも、人間は野蠻でない以上は、みな風流の美しい心を楽しみ、高雅な現象を愛さないものはない。かりにも美妙的な感覚を持つてゐるからには、麗しいものを見ては、これを楽しみ、豪放なものを見ては、これを愛し、あるいは、尊厳で偉大なものを見ては、なんとなく畏敬の念を生じ、あるいは、壮快で激越なものを見ては、知らないうちに感激奮発し、瀟洒でやわらかなものを見て喜び、洒落たものを見て楽しむ。思うに、人間がつねに持つ

ている性質であることだ。この感情に投合して、それによつて人の心を楽しませるのは、すなわち、芸術家の務めであつて、我々小説家の目的である。もし、小説の言葉に書かれたことが、うまく人情の深いところを探り、こまかに世の中のありさまの秘密をもさぐつて、金持ちの人も、立派な人も、面白いものも、情緒あるものも、あわせて写し出したなら、どうして文心を感動させないだろうか。まして小説の主とするところは、音響でもなく、色彩でもなく、この實際の世界の人情なのだから、一つの事柄、一つのものを取つても、すべていきいきと描き出そうとするおもむきがある。あの音楽と絵画と比べると、興味は、一層勝るとも、決して劣る理由はないはずだ。それでなくては、ジョン・モーレー<sup>[1]</sup>氏は、人間世界の批判を、人生の一大娯楽であると言つてゐる。小説は、つまり、人生の批評であつて、甲が失敗した理由、乙が成功した理由、あるいは、権力を得て道義心が腐乱する様子、あるいは、情に引かれて、道理を誤る事情を、はつきりと作品の中に叙述して、それによつて読者が批評できるようにする。具眼の人がこれを読むならば、その興味が深いことは、他の経書を読んだり、歴史を読んだりすることの比ではないだろう。これが西洋の国々で、先生、学士といわれるような人々が、皆争つて小説をひもといつて、快楽を求める理由なのだろうよ。我が国の一般の人は、昔から、小説をもてあそびものともみなしてきた。作者もまたこれに甘んじて、決して小説を改良して、先生や学士を楽しませる芸術しようと思つたものはなかつた。そういうわけで、わが国の小説、歴史小説は、これを西洋の小説と比べるときは、まるで歌川派<sup>②</sup>の絵師が描いた浮世錦絵を、

狩野派<sup>③</sup>の絵画に比べるようなものである。浮世錦絵は、必ずしも拙いわけではないが、いわゆる高雅の趣に乏しく、世の文心を慰めるのに足らないので、わずかに、子供や女にだけあそばされるのを役割としてゐる。それだからこそ、小説固有の利益というと、春の日長に一人座つて、居眠りをするのを防ぎ、秋の夜長に寂しさから来る憂鬱を慰める、ただ、これだけの効能があるばかりだと、わが国の一般の人々は思つていたので。これは、しかしながら、小説を女子供の玩具とみなして、芸術と見なかつた誤りより起きた過失であつて、その責任は、だいたい見識のない作者にあるとすることができる。以上に述べたことによつて、小説、歴史小説の直接的な利益については、だいたい述べつくしたので、さらに、間接的な利益について述べたいと思う。間接的な利益は、一つでは足りない。いわく、人の気格を高尚にすること、いわく、人に勸善懲惡の教えをすること、いわく、正史の補遺になること、いわく、文学のお手本になること、これらであらう。

(第二) 人の気格を高尚にすること。

全体に芸術といつたものにはこの大切な利益があるというわけを、すでに以前にも論じたが、今、その要点を再び述べよう。そもそも小説は、人間の肉欲に供するものではなく、人間の風流の嗜好に合せて娯樂を与えようと望むものである。そして、風流の嗜好、美妙の感情は、もつとも高尚な情緒であつて、文化が発達し、開化のすすんだ国でなければ、けつしてこの情緒を持つことはない。あの蒙昧な野蛮な人々をみると、ひたすら肉体の欲にふけつて、いわゆる美しい理想

を樂しむことを知らないで、わずかの間のふるまいも、その下心を問うならば、みな肉欲でないものはない。だから、その心はいやしく野蛮にながれて、ただ自分の利益ばかりを求めて、残忍なことはなはだしく、ものが可憐だということをはんのわずかさえも理解しないのだ。思うに、劣情のために身を責められ、卑しい欲のために追われるので、理性の力はますます萎縮し、良心はいよいよ力を失い、ただ卑劣な情欲をもつばらに発動させるからである。かりに蒙昧の国民でなくとも、ひたすら名誉と富を求めて利益を争う世界に奔走し、すこしもその欲望を休ませることなく、単に魔界の利益にばかりその心を傾けつくすならば、あるときは、人情からかけ離れやすく、あるときは、私欲に偏りやすく、卑劣で卑しい心には流れないでいようと望んでも、どうしてこれをとどめることができようか。これは、しかしながら、その胸の中にあの広々とした余裕がないままに、意味もなく情欲の奴隷となつて、その指図だけを受けるからであらう。この劣情を制するには、理性の力を借りなければならぬ。けれども、その劣情が激しいときには、利生も全く威力を失つて、これをどうすることもできないことがある。たとえば、劣情は熱病にかかった幼児と同じである。はげしくむずがっているときには、たとえどのような人がやつて来て、薬を飲ませようとしたところで、簡単にこれを聞くものではない。理性は、ちょうど厳しい父親のようである。とても怖い顔をして幼児を叱咤したとしても、むずがりが激しいときには、けつしてそのいうことを聞くことはないだろう。こういうときには、やむをえず、母親の手段を採らなければならない。母親の手段はどのようなものというところ

たとえば、幼児に良薬を飲ませようとするときであつたなら、まず、甘い菓子を与えて幼児の心を誘いながら、幼児がだんだんと喉が渴いてきて、飲み物を求めるときになつて、そうして煎じ薬を飲ませるのである。こうして、しばしば薬を服用して、その効能を知るようになると、その病苦を逃れたいために、勧めなくても自分から飲むだろう。

また、煎じ薬をしばしば飲むならば、喉の渴きもいくらかおさまるので、ひたすら水を求める心もだんだんと薄らぐだろう。この比喩は、もとより適切ではないけれど、劣情を制するのにも、まず、このように、きわめて激しく起こっているときには、理性によつて制することはできない。あの温かく柔らかな芸術を使つて、その文心に訴えながら、美妙の感覚を呼び起こして、だんだんと劣情を追い払つて退け、その本人の心をこの塵に汚れた世界の外に誘い、一種微妙な感覚を抱かせるようになつたならば、氣韻は自然と高尚になつて、しばらく欲の世界を抜け出すにちがいない。これが芸術が実益がなくても、なお、必要である理由であることだ。だから、芸術を常に愛して、しばしばこれに親しむならば、美妙の嗜好はますます長じて、気格はいよいよ高くなるにちがいない。小説は、すなわち芸術であるから、この利益があることはもちろんである。ただし、わが国の小説の中には、真に芸術と称えることのできる小説は、本当にまれなので、読者は、あるいは、この議論を本当らしくないと思われるだろう。私もこれを説明する良い方法がないのは困っている。すでに前段に述べたように、わが国の俗人がもてはやしている小説、歴史小説は、未熟であつて、なお芸術としての資質に乏しく、これを絵画に喩えるときには、

あの浮世絵の位置にあつて、真の絵画ということではできない。このたとえの意味を味わい見るならば、いわゆる本当の小説とはたしてどのようなものかをおおむね了解されることだろう。

(第二) 人を褒め奨めたり、懲らしめたり戒めたりすること。

小説の勧善懲悪に利益を与えるところがあるわけは、以前に先人がしばしば説いた。世の人もこれを口にすることは多い、とくに東洋の小説作者は、憂鬱をなおし、悩みを鎮める効能と勧善懲悪の利益をもつて小説、歴史小説の目的とところえ、もつぱら勧善懲悪を主眼として歴史小説を著わすものたちは、これである。勧善懲悪を主な目的として小説、歴史小説を著わすときには、それが勧善懲悪に利益を与えることは、もとよりそのはずのことであるよ。かりに勧善懲悪を主眼として、物語を構成しなくても、その素晴らしさが入神の域に達したならば、暗に読者を奨め、戒めて反省させることがあるだろう。私

が、奨め、戒めることの一カ条を、利益の中に加えたのは、まったくこの意味からでたことなので、けつして世上にもてはやされる勧善懲悪小説の利益を、こと新しく説くわけではないが、今退いて考えると、世の中の見えない連中にあつては、勧善懲悪小説の勧善懲悪さえ、効果が無いのではないかと疑う者がいる。いや、小説を罵り誇つて、淫らなことを教え、性欲をそそるものだというものがある。だから、ここに一言をここに費やして、勧善懲悪小説の作者の冤罪を解き、あわせて勧善懲悪の利益があるわけをいささか説明したいと思う。おおよそ事物を批判するには、まずその事実を解剖して、その仕組みをも知

つた上で、そして批評を下すべきである。そうでないならば、馬を批評しようと望んで、鹿を批評するまちがいはあるだろう。馬と鹿はその形や姿がおたがいに似ている。だから、まずよく馬を知って、そうして批評を始めなかつたなら、その形が似ていることから、鹿を馬と誤って認めて、鹿を批評して馬におよぼし、馬は深山にも住んでいゝものである、体中におちがあるといったならば、人々はかならず嘲笑して、これは馬とばかり見まちがえてたし、かにシカと認めたまちがいである、ああ、馬鹿らしいとどよめくだろう。小説を批評するにも、まずそのように、どのようなものが小説なのかをはじめに会得することなく、みだりに批評を下そうとするならば、小説に似て小説ではない、いわゆるロマンスのたぐいを評して小説におよぼすまちがいはあるだろう。中国の人が、淫らなことを教え、性欲をそそると罵つたのは、『金瓶梅』、もしくは、『肉蒲団』<sup>4</sup>などの評であらうし、わが国の俗人が、物語を排斥して風紀を乱す書物であるといったのは、男女の痴情の秘密を写して、下品で猥褻に流れた恋愛小説のたぐいを指すものだろう。そうである。そして、『金瓶梅』、『肉蒲団』ならびに猥褻な恋愛小説のごときは、これは偽物の小説なのだ。本当の小説とはいふことができない。そのわけはなぜかというところ、これらの数種の小説には、芸術においてもつとも忌むべき下品で猥褻な要素を含むからである。いや、猥雑な恋愛小説のたぐいは、もともと淫らなことを教え、性欲をそそることをその全編の目的として書いたことは疑いがなく、このような、偽物の小説、歴史小説がしばしば世の中に現われるのは、その責任は、読者の方であつて、作者にはないといったとしても、ま

ちがいでない。なぜならば、作者は総じて、世の中の好みに応じて著作の筆を採るものであるから、もし世の人が高雅であつて、淫靡になじむことがないならば、どうして猥褻で下品な小説、歴史小説を書いたことであろう。『源氏物語』がとても猥雑であつたのも、また、これは藤原氏が権力を独占して以来の文弱の弊害がそのようにしたのである。どうして作者をとがめることができようか。このようにいふならば、反対論者は、さらに私を批判していうだろう。総じて小説と称するものには、かならず男女の恋愛話を載せるようで、とくに写実の主旨で書くならば、道に外れた男女の恋愛話もとても多いことだろう。最近では、米国などでも、小説、歴史小説に刺激されて道に外れた恋に迷いはじめた若い男女もあつたと聞いた。このようにしても、淫らなことを教え、性欲をそそるものではないか、その理のあるところを聞きたいと罵るだろう。私がそこで答えていうことには、たしかに小説は情を主としてその脚色を作るものだから、男女の恋愛話のごときは、もつとも必須の材料であることだ。思うに、情欲の種類は多けれども、いつくしみ、情け深いという人情のありようほど大切なものはないからである。したがつて、本当の小説にも、主として男女の相思を説くけれども、あの為永派の作者のように、いつてはならない秘密を暴きたてて、卑猥の様子を写そうとはせず、ただ人の心の秘密を発いて、心理学者が説明しおとした心理を詳細に表現するだけである。だから、これらの歴史小説を読んで、邪淫の心を起こしたのも、もしくは、悪意をきざしたものは、その責任は自分の心であつて、歴史小説の関わるころではない。小説は、もともと世の中のありさま

を写しだしたものであるので、読者において優れた眼力があつたならば、書物の中で叙述したことよつて反省することができるのは当然である。たとえば、他人のなりふりを見て、自分のなりふりを正そうとするのは、見識のある人では普通のことであることだよ。もし、久松がお染を連れて駆け落ちしたくだりを読んで、うらやましく思う傾向があつたなら、かりに小説を読まなくても、いつかその気持ちは起ころにちがいない。たとえば、東隣に娘がいてその恋人と駆け落ちしたならば、たちまちこれに刺激されて、自分も西隣りの乙女を連れて駆け落ちしようと企てるだろう。この種の人は、他人の風を見て自分の風を正すことができず、自分で辛苦を経験して、初めて悟りを開く連中である。こういうわけだから、このような連中に読まれて不当な悪い批評を受けることは、大変な小説の冤罪であつて、小説作者の迷惑であることだ。金聖嘆<sup>5</sup>は、『金瓶梅』の巻頭でいうことには、「この書を読んでよこしまな気持ちを抱くならば、その責任はその人の心にあつて、この書物の責任ではない。」といつた。これはまたとても無理だけれども、もし、この言葉を本当の小説の場合にあてはめたならば、至当の批評というべきである。論じてここまで来たついでに、一言いっておくべきことがある。そのことは他でもないが、西洋でも東洋でも、小説を玩具のように考え、まだうら若い年少の男女に与えて読ませる習慣がある。これはとても危険な習慣というべきだ。だいたいの年が若いときには、感覚がもつとも敏感なので、外部の刺激を受けることは、大人にもましてひじょうに鋭い。だから、小説はいうにおよばず、すべて人間の心にはなほだしい刺激、感覚を与えるものを近

づけないことをもつて良しとするのである。芸術は、玩具に相違はないが、立派な人物や学士の玩具であるから、かりに危ないと思う理由はなくても、児童の玩具に与えることは、すでにその理にもとるといふべきだ。

小説を非難するものが、また、いうことには、小説に寓する勧善懲悪の意のようなものは、士君子はもとよりこれを悟っている。どうして小説を読んでこれを悟るようなことがあるか。だから、小説の寓意というものは、婦人や子供のために作ったものでなければ、遊蕩して好き放題に暮らしている凡庸な連中のために作ったものだろう。実際にそうであるとすれば、小説は勧善懲悪に役立つところはないだろう。なぜならば、婦人や子供は、蒙昧であつて、もとより物事の理屈にくらゐものである。小説を読んで、その脚色が変わつてゐるのを喜ぶだろうけれども、どうして寓意を悟ることができようか。また、遊蕩して好き放題の連中が小説を読むのは、ひたすら、憂鬱をなおし、悩みを鎮める手段とするためのみである。どうして善悪集美の区別などに眼を注ぐことがあるか、と。私が、再び答えていうことには、そもそも人が生まれて、心の正しい父母の教育を受けて成長し、悪を恥じる心があり、廉恥の念を抱くものは、戒めなくとも悪を避け、勧めなくとも善に趣くことであるが、それでも、時としては、知らず知らず、面目のないことをすることがある。これらはもとより不義とせしり、悪と罵るほどではないだろうが、もし、公然と世に知れたならば、かならず嘲笑の種ともなるだろう。勧善懲悪小説の完全なものは、このようなわずかなことでさえも洩らさないで、懲らしめ、戒めるも

のであるから、道義を口にするものであつても、これを読むにいたつたならば、ときにはうら恥ずかしく思うことがないわけではない。私の友人何某<sup>6</sup>は東京の人である。学問は和漢洋に渡つていて、心はとても正しく、もつともおとこ気があるので、他人に称えられる。けれども、それでも以前私にいったことには、自分は、八犬伝を読んで、八犬士の交際を見て、ひそかに恥じないではいられない、と。何某の信義をもつてさえ、このことがある。私のようなものは、このようなことがいつも多い。世の人で、ここに感じないものは、小説に勧善懲悪の徳がないのではなくて、読者に読書の目がないだけである。だから、小説が勧善懲悪を、ただ蒙昧の連中のためにするものであるというよなことは、近頃流行している草双紙を読んだものの言葉である。いわゆるロマンス(奇異譚)の評である。笑うべきであり、反駁する必要もない。このように弁ずるのは、かえつて大人げないといわれるだろう。

さて、また婦人や子供の連中にいたつては、もともと物を知らず、浅学であるから、脚色を読むばかりで、寓意などは、けつして知ることができないだろうというのは理屈ではあるが、そうはいつても、善悪美醜の区別が少しもないということではできない。善を勧め悪を戒めることが主眼の小説をしばしば通読するに及んだならば、勧善懲悪の意は、しらすしらすその心と胆に徹して、幾分か刺激することがあつて、その行為に影響があるだろうことは疑うこともできないのだ。ただ、その影響の力は、具眼の読者におけるものに比べると弱い。これが小説がもつたら婦人と子供のために書かれぬ理由であることだ。

さて、また、放蕩して好き放題の連中が小説を読むのは、実際、憂さ晴らしのためだろうから、寓意などを気にかけてはいけないことは、もともとそれはずのことというべきだ。そうはいつても、いくらばかりでも廉恥の心があるからには、かりに小説の寓意を知ることができて、ただしに悔悟し、恥じて、その行ないを改めるには至らなくても、もしられて、快いと思うものは、まれであろう。だから、このような連中において、やはり、善を勧め悪を戒める意は通じている。ただちに、善を勧める媒介にはならなくても、暗に良心を喚起する方便とはなるだろう。良心がしばしば喚起されて、ついには情欲を圧すにいたつたならば、悔悟改新の道を開くのではないか。これもまた知ることにはできない。ともかくにも、小説に勧善懲悪の力がないというのは、まちがっている。私の説はかえつて牽強附会の説であるかもしれないが、

西洋のものしりの何某<sup>7</sup>が、かつて、いったことには、小説に憂鬱をなおし、悩みを鎮める利益があるのは、みな人の知っていることであるけれども、このほかにきわだつた実益があることを知っているものはまれである。小説は、訓戒の種になるだろうものを沢山収めた宝の蔵であり、問屋である。人がひとたびその扉を開いたならば、益を得ることは、おそらくわずかのことではないだろう。訓戒というが、ひたすら仁義道德の主義を奉じて、人の行いの曲直正邪を批評するものと思う人もあるだろうが、私がいう訓戒とは、これとはちがつている。実際、道德の主義のようなものは、人生に必須の規律であつて、本来に大切な基準であるけれども、私のいう訓戒は、領域が広くて、ただそのようなことばかりをいうのではない。たとえ道德の領域を離れた

ものでも、かりにも人間に過ちを犯さないように戒め、その内と外の体裁を改良する力があるならば、すべてこれらを一般に呼んで訓戒というのであることだ。たとえば、人間にさまざまな礼法を教えるのも、機知や頓知をみがかせるのも、人情がなんであるかを悟らせるのも、すべてこれは訓戒の一端であるだろう。世上の小説読者にあつて、もしこの訓戒の所在を知ることができて、その真の味を味わうことができてこそ、はじめて小説や歴史小説の本当の効能をも悟ることができらうだろうし、かつ、快楽の果実をも摘むことができたといふべきである。ところが、世間の小説読者は、この道理を知らないものが多く、ひたすら趣向や脚色だけを読んで、それで娯楽の果実をすでに手に入れたと思うのは、まちがっている。それは、快楽の花を見ただけで、果実を得たものではないのだ、云々といつてゐる。ほんとうに活眼の議論であつて、よく小説に寓意することのできる勧善懲悪の性質を明らかにした新説であるとも称えるべきだ。勧善懲悪の利益については、もつといふべきことはたくさんあるが、くだけたので、ここでは省いて、また、後の回に機会があれば、さらに説き述べることもあるだろう。

## 〔注〕

- (1) ジョン・モーレー (一八三八〜一九二三) イギリスの政治家、小説家。  
 (2) 歌川派・江戸浮世絵の一流派。美人画、役者絵で知られる。  
 (3) 狩野派・室町時代に始まる。漢画系の画派で、日本画最大の流派。  
 (4) 『肉蒲団』・清代の好色文学。主人公が色道遍歴の末に、仏門に帰依する物語。性描写で知られる。

- (5) 金聖嘆・(二六一〇?〜一六六一) 明末の文芸評論家。『水滸伝』などの批評で知られる。『逍遙選集』では、「張竹坡」(二六七〇〜一六九八) 『金瓶梅』の批評をした文芸評論家。) に訂正。

- (6) 私の友人何某・『岩波文庫』改版の注は、柳田泉『小説神髓』の研究』の高田早苗、市島春城、山田一郎(いずれも、東京大学時代の同級生) 説を紹介している。

- (7) 西洋のものしりの何某・未詳。

(以下、次号)

(さかい たけし 日本文学科)  
 二〇一四年十一月十四日受理